
謎の音

長谷川ちず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎の音

【Nコード】

N8022Y

【作者名】

長谷川ちず

【あらすじ】

散歩をしていた男は、妙な音を耳にする。気になった男は音の正体を探ろうとする。

男は公園の池のほとりを散歩していた。

時刻はまだ早く、人影は無い。

「早朝の散歩はいいものだ。空気が冷たくて気持ちいいし、何より人の出す喧騒が無いのがいい」

鳥のさえずりと、木々の葉ずれだけが朝の空気を震わせる。

それらを楽しみながらしばらく歩いていると、ふと気がつくことがあった。

「何か聞こえる？」

蚊の羽音のような、モータが回るような、長く伸びた音だ。

それは時間とともに大きくなっていった。

「いったい何の音だろう？」

周囲を見ても何も無い。

やがて、音は唐突に途絶えた。

気になった男は、音が消えた方に見当をつけ、そちらに向かって歩いた。

「音はどうやら、この茂みの向こうで消えたようだ」

男は茂みを掻き分け、足を踏み出す。

すると、浮遊感が男を包んだ。

茂みの向こうにあったのは穴だった。

それも異常に深い。

男はどこまでも落ちていった。

「うわあーっ！」

なすすべなく、ただ叫び続ける。

どれだけ落ちたかわからなくなった頃、落ちていく先に光が見えた。

男は光に飛び込む。そうして男が行き着いたのは、公園の上空だった。

尚も叫び、落ち続ける男。

地面に叩きつけられて死んでしまう。

男はそう思ったが、すぐにその考えを改めることになった。

真下に底の見えない穴が口を開けていたからだ。

（後書き）

はい、長谷川です。

今回は軽ホラーな作品です。

でも怖くないです。

そんなところです。

では次回作でお会いしましょう。

届け、電波。

みゅーーーん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8022y/>

謎の音

2011年11月23日21時58分発行